

# ねこの みこの

猫穀通信

第 4 3 号

平成十三年

(2001)

4月15日発行

(年4回発行)

花祭考

東 明雅

「灌佛の比、祭の比、若葉の、梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の恋しさもまされ」と人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、菖蒲ふく比、水鶏の叩くなど、心ぼそからぬかは。六月の比、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓、またをかし。

有名な徒然草第十九段の一節であるが、昔、日本の春が終つて夏に移り行く自然の推移の微妙さと、それに伴う生活感情の変化のあわれさを、これほどの確に、これほど簡潔に表現した文章があつたのだろうか。私は七十年ほど前、九州の一中学生であつた頃、習つたこの一節がしみついて、灌佛と言えはずぐ、このような初夏の風物が思い出されるのである。これは私だけでなく、多くの、戦前派・戦中

派の方々にもおそらく共通するものであろう。それで私はつい最近まで、灌佛と同義語の花祭という語が、現代の季寄などでは、晩春の季語となり、花見とか花簪などと同じページに並べられているのが我慢出来なかつた。

更に、花祭と言っても、その花堂（花御堂）を飾る花は、桜の花ではなくて、折から山野に咲いている躑躅や椿・檜あるいは石楠・卯の花なども大いに使われている。躑躅や椿・檜などは春の花であろうが、石楠や卯の花は夏の花である。これらで作つた花堂（花御堂）は春の正花となり得るであらうか。

いろいろ花祭・花御堂の取り扱いに苦心している頃、九州の姫野恭子さんから、花御堂を春の正花に使つたが、それでよろしいかとの質問を受けた。たしか、去年の夏の頃だつたと思う。私はその頃まで徒然草の桎梏の中に居たし、また、いろいろの人から、日本国中に、一月遅れ、または旧暦で灌佛の行事をやつてゐる所もあるという話を聞かされていたので、花祭は初夏の行事、また花堂あるいは花御堂は夏の正花とした方が、あまり多くない他季の花をふやす事にもなるのではないかと返事をした。

その後、私は小さな季寄せを編集することになつて、その為、もう一度花祭という語を調べたところ、花祭という季語は、江戸時代出版されたすべての歳時記・季寄の類のどこにも出ていないということに気がついた。

図説大歳時記春（角川書店）の解説によれば、もとは浄土宗で灌佛会を花祭と名づけて行つたのが、後に各宗を通じてこの名称を取り入れたとあるが、この語が俳諧の世界に入つて来たのは何時だつたのであろうか。

明治五年の改暦は、俳諧に様々の影響を与えている。たとえば正月が改暦によつて新暦では冬の季に入るのを嫌つて、新年という新しい季を作つて、年頭にすえ漸く納得したことは最も顕著な例であるが、旧暦の四月八日も現在ならば五月の半ごろ、若葉に物思う憂鬱な気候から、新暦の四月八日、まさに桜の花が咲き、満開になる一年中の一番よい季節に変わったのであるから、従来のしつとりした灌佛会の雰囲気は自ら無くなり、抹茶くさい灌佛会から、明るいはなやかな花祭という名が使われるようになったのは当然である。

憂曇華の木陰はいづこ仏生会 久女

わらべらに天かがやきて花祭 舟月

この二つをくらべる事により、佛生会（灌佛会）と花祭とが、同義語でありながら、それぞれが対蹠的な内容・感情を持つてゐる事が分るのであろう。

要するに我々が徒然草から得た灌佛会の幻想は幻想として、それを現代の花祭に無理に押しつけようとしなければよいのである。

だから、私は花祭・花堂（花御堂）ともに晩春の季語・春の正花として認めてもよいと思う。

辻 杏奈

息をのむような懐かしさに打たれ、じっと佇んでいました。なだらかな斜面に広がる田んぼの風景です。区画整理はなされないまま田んぼは気ままに等高線に沿って土手が連なり、ところどころに生えているハンノキがアークセントを与えています。人々が田にはいり、緑のなかでなにやら仕事をしています。

こんなところが都心から1時間のところにあつたんだと、じわじわと暖かい思いがわき上がってきました。一〇〇ヘクタールを超える水田ですが、河川敷にあるため大型機械が入らず、昔ながらの田んぼの風景を残していたわけです。

私が育った地方ではものごころのつく頃から、もう田んぼはきつちり1アールに区切られ、整然と両脇に用水路が流れて大変効率的に見えました。眼前に広がるような風景とは少し違いますのに、何故、こんなに懐かしく感じるのか不思議でした。これが日本の原風景なんだな、きつと日本人の遺伝子に深く刷りこまれている風景なんだと心の中で納得しました。

何故、ここに来たのかというと、実は、ここで農薬の空中散布が行われ、すぐ下流の東京の浄水場にも農薬が流れ込むのをやめ

てもらおうとして見に来たわけです。

空散当日、私たちが見守る中で、突然、ヨシキリが騒々しく鳴き出しました。ヒバリも高いところで鳴いています。アオサギがゆつたり空を舞っています。そのほか無数の生き物たちがこのさして広くない空間にすんでいるのでしよう。逃げなさい、逃げなさい、もうすぐ、轟音を上げてヘリコプターが来るでしょう。

農薬の空中散布はこれら生き物を無差別に殺します。殺さないまでも、生き物たちの生命活動は落ちるでしょう。このような美しい風景の中で、鳥、虫、魚、植物が痛めつけられるのを、ただ、見守るしかない無力感をかみしめました。

日本の季語は、この原風景から生まれたものと思います。外国に長期滞在する人は歳時記を持っていくと言われています。それを見ながら遠く日本を思うのでしょうか。季寄せに出てくる言葉のなんと農耕に関する事柄の多いこと。でも、田舎育ちで、60歳を迎えようとしている私ですらもう知らない言葉が多くなっています。季語は虚構になりつつあるわけです。これらの季語を操り、連句を詠む人たちは既にどれくらい季語が過去のものとなったと認識しているのでしょうか。

21世紀は環境の時代といわれています。この言葉には主体がないので曖昧です。環境をこれ以上悪化させないために何かするとい

ことなのでしようか。それとも、環境ビジネスが盛んになるということでしょうか。誰かが何かやってくれるのではないかと期待は残りますが。

日本の季語を実体のあるものとして残すためには、日本の農業を残さなければならぬだろうと思います。その農業も既に行き詰まっている機械化、大型化のアメリカ式農業ではなく、言ってみれば有機農業でなければならぬと思うのです。

前述の河川敷の田んぼは、今、農薬空中散布をやめ、減農薬の田んぼとして残っています。周辺の住民がそこでできるお米を食べ、市も援助しています。あの風景はまだあるのです。

赤とんぼや螢、そして涼しい風が吹きすぎっていく田園風景をただ享受しているだけでは、ますますこれら懐かしいものたちは減っていくでしょう。同時に、先祖から受け継いだ私たちの繊細な感じ方も、ずいぶんがさつなものに成り下がっていくのではないのでしょうか。いたずらに環境の悪化を嘆くだけでは何かを守る力は生まれません。自然に対する感性を研ぎ澄ましている俳句人・連句人であれば、豊かな季語を育んできたものを守る上でも、また独特な関わりができるのではないのでしょうか。

第一回「源心」コンクール募集要項

形式 「源心」独吟不可。

過去の作品でも可。但し選者の添削を受けたものを除く。

応募用紙 所定の用紙を使用。コピー可。

(用紙は例会等でお配りします。地方の方にはお送りします)。

応募料 一卷につき千円

送り先 〒二二七〇〇三三 横浜市港北区 太尾町一四〇五―一―二〇九

松本 碧 宛

受付期間 平成十三年九月一日〜十月末日

選者 東明雅先生・式田和子先生

発表 平成十四年一月十六日猫養初懐紙

賞 天・地・人

問い合わせ Tel・Fax 〇四七二一七二一八―一九

梅田 利子 迄

「源心」という形式をご存知でしょうか。

源心は、平成五年十一月の源心庵の会において、東明雅先生が初めて発表された形式です。

「ねこみの通信」第十四号にその経緯と第一巻作品が載っております。

源心は二十八韻(表4・裏10・名残表10・名残裏4)、二花二月、恋も二ヶ所あります。

歌仙ほど時間がかからず、内容はほぼ歌仙と同じくらい盛り込めます。結構な形式にて私共は折にふれこの源心を巻いてきました。他

のお席でもなされているもの、未だ各所に広く活用されるには至っておりません。この度「源心」のコンクールを企画いたしました。皆様どうぞ試みてください。沢山の応募をお待ちしております。季節配置表はあくまでも目安ですので、それぞれ工夫していただければ幸いです。

(文責・源心庵の会 梅田 利子)

「源心」季節配置の一例

発句	新年	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬
春(花)	春(花)	秋(月)	秋(月)	冬(恋)	冬(恋)	春(恋)	春(恋)	夏(恋)	夏(恋)	秋(恋)	秋(恋)	冬(恋)	冬(恋)	春(恋)	春(恋)	夏(恋)	夏(恋)	秋(恋)	秋(恋)	冬(恋)	冬(恋)
春(花)	春(花)	秋(月)	秋(月)	冬(恋)	冬(恋)	春(恋)	春(恋)	夏(恋)	夏(恋)	秋(恋)	秋(恋)	冬(恋)	冬(恋)	春(恋)	春(恋)	夏(恋)	夏(恋)	秋(恋)	秋(恋)	冬(恋)	冬(恋)
春(花)	春(花)	秋(月)	秋(月)	冬(恋)	冬(恋)	春(恋)	春(恋)	夏(恋)	夏(恋)	秋(恋)	秋(恋)	冬(恋)	冬(恋)	春(恋)	春(恋)	夏(恋)	夏(恋)	秋(恋)	秋(恋)	冬(恋)	冬(恋)
春(花)	春(花)	秋(月)	秋(月)	冬(恋)	冬(恋)	春(恋)	春(恋)	夏(恋)	夏(恋)	秋(恋)	秋(恋)	冬(恋)	冬(恋)	春(恋)	春(恋)	夏(恋)	夏(恋)	秋(恋)	秋(恋)	冬(恋)	冬(恋)

※発句に花があれば正花は出さない。

◎猫養作品集十一号が出来上がりました。

ページ数 一八〇ページ

合評座談会・歌仙「秋うらら」

歌仙 三四巻

源心 四巻

短歌行、箴 各一卷

二十韻 十二巻

発句六句(秋元正江)など。

尚、今号より一冊二千元となりました。

〒二七七一〇〇五一 柏市加賀二一二二一十一

〇四七二一七二一八―一九 梅田利子 迄

↑↑ 本の紹介 ↑↑

『歌仙行』村野夏生

○ 連句復興期の昭和四十七年、野村牛耳に連句指導を受けて以来の、著者の目を通しての同時代の連句に対する熱い評論。同時代の俳諧往来も興味深く、詩人・俳諧師としての著者の感性が漲り、スリリングな読み物となっている。

平成十三年三月二十日 発行

発行所 ああノ会「欄柯」編集部

〒一八〇一〇〇三

武蔵野市吉祥寺南町4-21-25

初懐紙

歌仙「淑気かな」 東明雅 捌

勝ち越しの新大関の淑気かな

幟いろいろ唸る初空

四阿に臘梅の香の満ち満ちて

まとめてかたく絞る雑巾

夜学子に代数幾何の解けぬ月

稲妻過ぎて逃げるこほろぎ

八ヶ岳登頂したり茸焼く

含羞の眼に何か魅かるる

口説にもしつくりゆかぬまがりかど

両市合併変る町の名

評判の茶房に集ふベント族

ゲノム解説月の涼しく

近頃は人語をしゃべる冷蔵庫

声なき声に耳すます猫

掘り出して埋めては又も掘り起す

北斎漫画外国で買ひ

名人の長屋の花見に聞き惚れて

男は黙って朝寝朝酒

遠蛙肝のごとく友を呼び

アルカイツクスマイル希臘神像

タベルナにグレース・ケリーのやうな美女

嫉妬深きが添ひ遂げるこつ

埋火をかき集めては火を熾し

頭に雪をかぶるお地蔵

この年も赤字国債積るだけ

夢の跡見る夏草の中

中天に野球少年ホームラン

月の兎の跳ねる秋の夜

唐辛子かけては滅す体脂肪

おくんち踊りいきなあねさん

初めてのキスお囃しがB・G・M

これから先はほどらひの恋

成せば成ると説きし恩師も傘寿なり

島影背ナに背骨すつくと

乗込の鯛がひしめく花の頃

とうとうたらり春の鈍行

平成十三年一月十七日 グランドヒル市ヶ谷

連衆 八代 諏訪欣二 鈴木美奈子

鈴木千恵子 荒川有史 棚町未悠

歌仙「若木の」 青島ゆみを 捌

しなやかな若木のなりに集ひけり

新しき世を祝ふ初席

石鱈玉千変万化まはるらん

池面をついとよぎるつばくろ

坂下る茶摘の村に昼の月

学校帰り子らの歌声

天井の絵柄良き出来数百年

わき目もふらず手に手とりあひ

あまりにもやさしきといふ罪作り

業平忌には籠る草庵

夏茶碗ひとりお薄をたのしみて

挨拶も無く猫の往来

月の宴いと同志のせいくらべ

秋袷着てたまに銀ぶら

やや寒にヒトロボットを連れてみて

隠れて棲めり電子ウイルス

異国の花もめでたし花行脚

片言会話交すうららか

魚島を指す船団一列に

バンドネオンのタンゴ明るく

マラソンの最後のひとりテープ切る

造反劇の影の黒幕

軒水柱悔いかりかりと噛みくだき

隙間風くる魔風恋風

ふんだんに酒を吞ませて乱れさせ

抽象画には要らぬ解説

それもまた人まねといふ声がする

小判ざくざくそこで目が覚め

ナノテクの世を見据ゑたり月の舟

十字架祭の鐘渡る街

ゆつくりと老いには似合ふ俵編

傘寿過ぎてても旅を夢見て

地球儀を貰ってゆくと遊学子

S・O・Sがケイタイで来る

生涯を花の堤で暮したく

雖あられにはつむ童謡

史

未

二

千

史

同

史

史

二

史

史

史

史

史

史

史

史

史

史

史

史

史

史

史

史

史

史

史

史

歌仙「初東風や」 副島久美子 捌

初東風や丘に登れば富士近し 久美子

飾りはやしに賑はへる子等 和代

クレープを返す手並のあざやかに 豊美

ロボット犬もお座りをして 碧

居待月主の話す古詩故実 志げ子

後の袿の躰系抜く 志世子

太郎冠者しづしづ参る紅葉狩 碧

グッツの売れるロビー売店 碧

十ドルのステーキけふの昼御飯 豊

髻もじやの彼接吻が好き 同

逃げ廻り罵りながら気を持たせ 碧

動物園を照らす夏月 代

箱庭のフィギュア倒すなみありて 豊

救命丸をいつも忘れず 世

ひとり来てひとりて拝む修羅羅仏 代

下る支持率総理のほほん げ

飛花落花千鳥ヶ淵の舳ひ舟 世

パステルで描くかぎろひの中 豊

餌をやる眼のうるみたる孕鹿 世

社の裏で踊るばらばら 同

巡業の禰かつぎ髪みだし げ

やつと間に合ふ離陸寸前 世

鶴渡る黒龍江の大湿原 豊

魍魎魍魎を写す寒影 代

遺伝子を残しましょうよ君と僕 げ

いざなみ姫へいざなぎは言ふ 碧

二つめの仕形斬の盛り上がり 代

かたすそさせとすだく蟋蟀 碧

泣くなかれこの月を見ず絵空事 同

どぶろくそつと隠す本棚 代

自然とはどう向き合ふか新世紀 げ

捨てる技術の賛否いづれに 世

葛籠より出てくる刀掛軸も 碧

茶目つ気たつぷり婆の意地悪 豊

鈍行の列車乗り継ぎ花の旅 久

メールきりなく送る永き日 げ

平成十三年一月十七日 グランドヒル市ヶ谷 碧

連衆 長崎和代 高橋豊美 松本碧 同

蒲原志げ子 秋山志世子 碧

歌仙「福壽草」 武村利子 捌

言の葉の雅伝へん福壽草 利子

幼も混り歌留多とる声 和子

浅蜷掘る干潟に潮の満ちてきて 佳之子

めかり時なり深々と寝る 芳子

玻璃戸越しブリキの兵に春の月 美恵

ちよつと待つてと口癖に云ふ 千恵子

どこかしら読んだ気がする名作集 良彌

ハート絵文字で送るメル恋 恵

ひまはりの迷路の中に君を追ひ 芳

出番でござる土用三郎 彌

カナダまでバンジージャンプ通ひつめ 之

お薄に砂糖スプン何杯? 千

月高し襲名興行はねし街 之

雁鳴き渡る佃大橋 芳

冷まじく再編省庁動きだす 利

株を持ちゐて一喜一憂 和

校庭の若木の花に魅せらるる 彌

数珠子もごもごかへる頃らし 恵

佐保姫のまします山は連なりて 同

満員電車トンネルの中 千

掏摸名人DNAを子に伝へ 恵

風呂敷包み確と吟醸 芳

死んだふりしてもペロペロなめる熊 和

ラガーの夢はリストラで消え 之

吉本と宝塚とが登りゆう門 彌

葉巻燻らすぼくの新妻 同

禁断の媚薬すんで飲みもして 之

半音どこかずれるLP 千

門限を月の光が忘れさせ 芳

むかごごはんに浅漬がよし 千

追はれてるとんぼの身にもなつてみよ 恵

売れゆきがよい小さきブローチ 芳

旧制の高等学校同級会 和

自販機の列個性それぞれ 千

\*金鯱が茶釜となりし花茶亭 利

望遠鏡に巢立ゆく鳥 之

\*名古屋城一の丸茶亭 之

平成十三年一月十七日 グランドヒル市ヶ谷 彌

連衆 式田和子 染谷佳之子 松島芳子 之

山口美恵 加藤千恵子 佐藤良彌 之

歌仙「8の字に」 中田あかり 捌

8の字にくぐる茅の輪や初詣

あかり

破魔矢を授く祢宜の広袖

達子

浪音のとどろとどろに響くらん

紀子

ピタリ動かぬ盤上の王

泉子

瑠璃杯に浮べて干せる望の月

了齋

膝のあたりにいとど飛び跳ね

富美

芸術祭版画入選きまりしと

満子

わだばゴッホになると出奔

紀

騙すよりだまされるのがしあはせさ

齋

質草としてもらふ宝石

泉

Eメール予期せぬ言葉でる恐怖

同

水母に似たるものが振り向く

紀

月涼し寄宿舎の塀のぼる奴

達

礼儀作法のやかましき祖父

美

へそくりの株値どこまで下がるやら

満

どつと崩れる積んどくの本

齋

花浴びて禅問答の続きをり

泉

ピクニックめく春闘の列

達

飛びたちし鳩の翼に風光る

満

巴里にゆきたし巴里は遠かり

紀

エクレヤがかどの奥さん大好きで

泉

ゴムマリのやう弾む挨拶

紀

いつのまに四肢に蹄が生えてくる

齋

魔女は写真に写らないもの

達

水っ漬ばかりが残る夜具の衿

紀

埋火かきて探り合ふ足

満

御無沙汰のお詫びかたぐちと寄って

泉

木曾まで五里を馬に月乗せ

紀

ポケットに団栗つめて戻る子ら

美

秋狂言の稽古始まる

達

とどろ巻く青大将を紙で貼り

紀

肩こりに利く鍼の看板

美

老職人いまだ小僧と謙遜し

満

墓・戒名と準備万端

達

花の宴銘酒李白に溺れけり

り

空の奥処に満つる囀

齋

平成十三年一月十七日 グランドヒル市ヶ谷

連衆 篠原達子 椿紀子 青木泉子

鈴木了齋 村田富美 田村満子

歌仙「武州訛」

中林あや 捌

ひとしきり武州訛や小正月

あや

十六むさし盤の伸びらか

丁那

新線の列車発着頻繁に

順子

ほどよきところ頁折る癖

健悟

玻璃越しの玉兔をのぞく奥座敷

藍香

柚子の香ほのと漂ひてくる

一恵

スイッチを押せば物言ふおどろかし

悟

ロボット大会競ふ学生

恵

好きな彼眼鏡とつたらもつと好き

順

ありのまんまに書いた恋文

香

突端がフオークのやうな島に住み

那

ここが一番地ビールの味

香

蠍座のお婆が招く月清し

悟

尻の下には硬い座布団

那

驚策が鳴りて堂宇の動きだす

香

バブルの夢か夢のバブルか

悟

北辺へみちびかれゆく花の旅

恵

和紙延べるかに若布干しあげ

順

さへぐりの裏庭薪を割る男

那

忘れた頃に届く入選

順

プリン体だけが敵の暮しにて

悟

手前勝手は親譲りなり

恵

寒茸の山は誰にも教へない

香

合鍵同志ばったりへ雪

順

美しき「裸のマハ」の高笑

恵

きのふおろしたヒール危なげ

那

上海は贗金作り席捲し

同

素知らぬふりの犬が横切る

悟

月光の古城に開くコンサート

順

甕の水にもこだはりの秋

那

おさまりはままかり鮎の土産物

香

言葉の綾で生きる乱世

悟

大統領すこし眉間を開きたる

那

ぼんやり仰ぐ雲のいろいろ

恵

切り通し抜け満開の花明り

や

門前町は亀の鳴くらし

順

平成十三年一月十七日 グランドヒル市ヶ谷

連衆 浅賀丁那 和田順子 佛洩健悟  
若松藍香 山崎一恵

歌仙「新世紀」 市野沢 弘子 捌

冬の雪はるかにあけし新世紀

万祝の勢揃ふ初漁

春愉しカレイドスコップ覗きぬて

豆炒りの香の流れくる窓

かんくんと長き踏切朧月

犬のリボンをちよつと直しぬ

缶ビール桶にたつぷり冷やしをり

髭黒々と峰入りのひと

同棲をしらばつて見合して

後のころのちぢに乱るる

ロシア語のメールはいつも文字化に

北方四島地図ありやなし

忠敬の辿りし山路訪ふ紅葉

夕月仰ぎたくおくれ蚊

ロザリオ祭でつぷりとして神父さま

母の形見の売れしバザール

花の中漕ぎ出したる渡し舟

雉ほろくと羽うち飛び立つ

序の口ののどけき昼のちゃんこ番

漫画で読んだ諸葛孔明

京劇の剣の舞のからみ合ひ

人材求むあすの政界

その昔メランコリーで今は鬱

ヌードに毛皮まとふ屋根裏

しとねをば濡れあと残り雪女

眼鏡の弦の少し曲って

エリートの鼻あかさんと老刑事

麻布十番もぐる地下鉄

四時半に開く銭湯月白く

梯子ゆらくホップ摘みをり

奉納酒さげ虫送る列につき

録音器材しまふ道端

ストレスにモーツアルトが効くと言ふ

遺産は父の借金と夢

ふり仰ぐ天平の塔花吹雪

なに啄むか軒の子雀

平成十三年一月十七日 グランドヒル市ヶ谷

連衆 百武冬乃 吉村多みこ 豊田好敏

倉本路子 小池啓子 佐々木有子

歌仙「巳の年」

梅田 利子 捌

巳の年の巻きつ巻かれつ初懐紙

世紀を越えて咲く福寿草

山笑ふマウンテンバイク走るらん

塩も程よき浅蜷鍋なる

月まどか八十八夜のよき予感

招待状は金の縁取り

賑やかに教会堂の鐘が鳴る

子供ぞろぞろメルヘンの町

サーカスのピエロは頬にそら涙

毛虫怖くて肩に抱き付く

短夜は逢ふ間も惜しく明け離れ

袋小路に迷ふ探偵

いも蔓を引けばぞろぞろ贈収賄

犬が不覚に落ちる猪鬣

歩いて直ぐ村尽きて居待月

ハーブ石鹸香りふくよか

ロシヤ語も英語も酔うて花の宴

切れた風船何処へ行くやら

高台に練御殿のおぼろなる

完全踏破伊能ウオーク

空中にぽいと做りしサングラス

人工芝に濡れる白球

蒐集品値を吹っかけて懐手

里の神楽の飄々と舞ふ

騙されてみたき男の後影

二人同時に娶る艶福

寝心地の悪いベッドは捨てるべし

ケイタイいつも胸のポケット

月渡るつられ欠伸の終列車

ふるさと自慢稲の出来栄え

評判の触れる彫刻美術展

柔らかかった母さんの手よ

童謡を口ずさみつつ夕餉時

「いらっしやいませ」店の文鳥

優雅とはこれに尽きたり花乞食

春の火鉢に体温める

平成十三年一月十七日 グランドヒル市ヶ谷

連衆 橋野代々子 上月淳子 日高英二

杉山壽子 佐古英子 本田弥生

山本要子

歌仙「ひとひら」 坂本孝子 捌

雪国のひとひらにじみ初日より

福寿草笑む窓の明るさ

バス電車乗り継ぎけふはスムーズに

たたいて軽し胸のポケット

地図覗く頭集めて月の山

稲刈鎌の研いである納屋

ゆく秋の土との対話ろくろ蹴る

このごろ何故かバラードが好き

すぐ治る恋の火傷をくり返し

手綱次第で魔性仏性

岩燕群れて水量の増せる川

夏の霜踏む猫のラブちゃん

ミレーの絵競り勝つてより運が向く

伯刺西爾<sup>\*</sup>に居たはとこ大伯母

正調の故郷の訛持ち帰り

床屋の二階習ふ清元

シスターに行き遇ふ土手の花ざかり

流し難追ふ小魚の影

母の息たしてふくらむ紙風船

OA機器にアレルギー出て

下戸のする酒の批評の心外な

一夜の乱に沸いた列島

そのかみの遊女も寝たる城櫓

ばっち要らずで男伊達売る

鮮やかに思ひ切るとき冬薔薇

床にちらばるタロットの札

カーナビを付けて運転ややくしく

下町人生指物師継ぎ

卓袱台の月に供へし零余子飯

折れた前歯に風の漸寒

タクシーを躲して走れ爽やかに

駅前留学いまだかたこと

新世紀広告塔の夢紀行

夕刊新聞見出しだけ読む

後シテの翔りにはぜし花簪

宙より現れて舞へる蝶々

\*伯刺西爾IIブラジル

平成十三年一月十七日 グランドヒル市ヶ谷

連衆 伊勢本如代 土屋実郎 橋朱鷺子

久保田庸子 登坂かりん

歌仙「灘一本」

下鉢 清子 捌

灘一本提げ餅花の下をかな

両横綱の強き初場所

カンバスへ雪解の川を筆太に

蛙とる児と連れ立ちてゆく

建て替への鉄道駅舎月朧ろ

選びかねたるパソコンの本

直木賞候補重ねて受賞して

いつの間にやら泣き黒子出来

若衆が祭太鼓を揃ひ打ち

親の世代は隠れたる恋

しつとりと熱海の女の深なさけ

捨てられた犬鼻をくんくん

千枚田月を映して夜もすがら

衣打つ技を誰も伝へず

物かげに鈴虫見つけ資料館

刀傷ある柱黒ずみ

ライラック咲くころ赴任して来たる

ポートレースのコックスの声

河原鶉とび交ひてをり土手の道

老子莊子の神仙の郷

宰相の支持率低し蛇莓

眼鏡の奥がむず痒くなり

この部屋は機械仕掛の介護人

少しとぼけて肩に手をやる

寒空にミニスカートの幼な妻

絵屏風囀ひの闇の睦言

省庁の名のみ変へたる立看板

財布空っぽ貯金ちよつぱり

何となくギター爪弾く月の影

ユトリロの街霧に沈んで

菩提の果実酒自慢同窓会

救世軍に運ぶ古服

地球上どこか災害絶え間なく

姉の背中を流す銭湯

風峠思ひ思ひに花を見て

嗅ぎ茶の好きな猫の三吉

弥

麻

玲

肝

樹

樹

麻

樹

樹

麻

樹

玲

弥

樹

弥

肝

弥

玲

同

玲

麻

玲

清

弥



佛淵 健悟

俳句を始めた二十年ほど前、結社の先生は、どうしてこんなに忙しくしておられるんだろうと思われくらい、息せききって句会に駆け込んでこられる方だったが、今にして思うと、あれも又ご自分のテンションをあげるためのひとつの儀式のようなものだったのでは、と思わないこともないのである。

その先生は、句会に出す句は大抵電車の中で作って来られ、何週間も前からうん／＼やっている身には不思議な気がしたが、電車の中というのは意外に創作や思考の揺籃の時であるということがその後だんだんに分かるようになってきた。

連句の会に出かける時、会場に着くまでの一時間から一時間半の発句を考える時間（大抵電車の中ということになるが）、すでに助走が始まっている。これは、自分の句が立句に取られようと取られまいと、捌きであるなしにも関係なく、一座建立の水位を上げておくためにも大事なウォーミングアップである。「発句を」と所望された時、さっと出せるようにしておくことは、「一夜のほどいくばくかある、無風雅なり」と一晩中芭蕉から叱られた去来の話（「去来抄」）からも分かるように、一巻の滑り出しに大事なことである。

さて、その電車の中での読書であるが、通勤時間帯の殺風景を緩和し、あわよくば創作のインスピレーションも得たいというそんなもくろみに沿うものとして、私の場合は『武玉川』がある。これは深入りして駅を忘れる危険もない。岩波文庫の四巻本として出ているので求めやすい。

この本は江戸時代の高点付句集で、優れた付句だけを集めたもので、長句短句両方がある。分量が多いのですぐには読み切れないのもいい。現代人には「???」といった句が数多く出てくるのも好都合。蚕がせっせと食べ尽くしていくような読書だけでなく、いつ果てるでもない歩留まりの悪い読書というものもなかなかいいのである。分からない句が多いというのは、知識の不足もあるが、笑いや共感の質、生活の経験が違ふからで、むしろ何百年も前の民衆の俳感覚ににやりと出来ることに驚きさえ覚える。

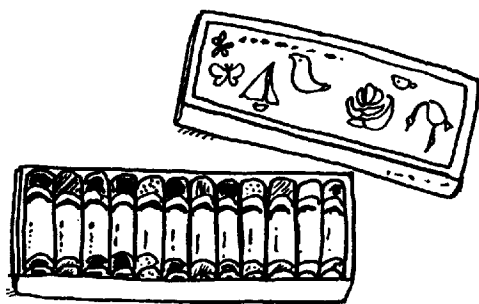
読まれてない方の楽しみを奪うつもりはないので、ほんのいくつか……。

「目へ乳をさす引越の中」、これは別な篇に出る「夜討の跡で目へ乳をさす」で分かるように、赤ん坊におっぱいを吸わせるの図ではない。母乳で目のゴミを洗ってもらうことだが、経験者もおられるだろう。

「一日の機嫌も帯のメ、こ、ろ」、「牛一つ花野の中の沖の石」、「子守のもたれかかる裏門」、「腹の立つ時見るための海」、「絵

踏に向ふ君か高棲」、よく共感できる美しい句である。「抜た大根で道をおしへる」、のちに、一茶が「大根引大根で道を教へけり」と作っているが、同じことを言うなら短い方がよい。「呑人がなくて馬鹿な曲水」、「瓜ぬす人の瓜でふたれる」、「持参を尻に敷島の道」、「狐が落てもとのうそつき」、「黄粉にかまく老の唇」、「手を揉む音の高い百姓」、鋭い観察が活きている。恋句もいい。「恋無常猪牙とすれ合ふ施餓鬼船」、「日本の意地を見せる心中」、二階からけいせいも田を植たかり」。

面白い／＼と感心しているだけでは心許ないので、後世に残るような「平成武玉川」ありやなしやと、時々はこちらへも思いを馳せている。



英語連句の試み 花鳥風月（十七）

浅賀 淑代

日本列島の桜前線は、すでに北上しきつた  
でしょうか。今年、皆様はどんな花に出逢わ  
れましたか？

さて、三年前の花の頃にスタートした二十  
韻「ねこの子」は世紀を跨ぎ、今回、挙句。

付句を橘朱鷺子さんから頂戴しております。

- 二 南北サミットマジックの壺 慎二
- 三 夢殿で逢ひしは花の幻か 明雅

付

挙句 霞の底に人も遠嶺も 朱鷺子

in the depth of the mist  
mountains and strollers (拙訳)

ここ数年、連句の国際化が言われるようになってきました。季語や式目の問題、また、捌き手や訳者の養成など課題は限りないようですが、先ず、母語以外の言語による連句実作に関心のある人々に、適当な場（座）に関する情報が不可欠。今後、その方面の情報が整理・提供されていくものと期待しています。それでは、今回満尾した「ねこの子」（和・英）を皆様に披露し、拙稿連載の締めくくりとさせて頂きます。付合に参加下さいましたご連衆、また、翻訳にご協力下さった皆様に心より感謝申し上げます。（終）

脇起二十韻「ねこの子」

ねこの子のくんづぼぐれつ胡蝶哉 其角

土筆むくむく生ふる中庭 忽みこ

暮れかぬる釣橋渡る自転車に フェイ

酒場でダーツの挑戦を受け アリス

ブルースの洩れくる秋の赤煉瓦 政志

葡萄を抓むやうにキスして パトリシア

月光ゲにふたりの肌のすさまじく ジェリー

忍びの道を説きし巻物 紀彦

仕立屋はスリッパまでもシルクサテン イオン

豪華客船雪に包まれ クリス

近づける悲劇も知らず踊りあて ハリー

聖母子像に額づくは誰 碧

ライオンも小鳥も驢馬も遠巻きに 紀子

真夏の月から墜ちたE.T 富子

食堂に過去の女ら嫉妬の目 ニール

ビクトリアピーク肩寄せもせず 瑛子

夜話は第二次世界大戦史 かりん

南北サミットマジックの壺 慎二

夢殿で逢ひしは花の幻か 明雅

霞の底に人も遠嶺も 朱鷺子

起首 平成十年四月一日

満尾 平成十三年三月三十一日

文音（電子メール・ファックス・葉書）

◇案内

○ 猫養同人会

日時 六月二十日（水）

午前十時半〜午後四時半

場所 清澄庭園・大正記念館

○ 猫養会

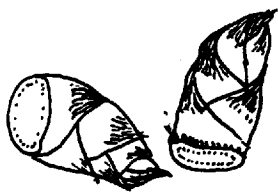
日時 七月十八日（水）正午〜

総会の後歌仙興行

場所 江東区芭蕉記念館

◎ 次の方々は猫養会同人に推挙されました。

- |        |       |
|--------|-------|
| 由川 慶子  | 繁原 敏子 |
| 八木 聖子  | 稲垣 渥子 |
| 佐古 英子  | 大島 洋子 |
| 山田 美代子 | 井上 蘭石 |
| 間 佐紀子  | 宮内 志乃 |



---

Wakiokori Nijuin "Kittens"

Started: April 1, 1998  
Finished: March 31, 2001

<First Front> kittens tangling and untangling around --- a butterfly	Kikaku	<Last Front> the dancing passengers do not notice the oncoming tragedy	Harry
here and there in the garden horsetails shoot up	Emiko	I wonder who is bowing before the Virgin and Child	Midori
twilight lingers --- by bicycle I cross the suspension bridge	Fay	at some distance lions, birds and donkies surrounding him	Michiko
challenged to a game of darts in the neighborhood tavern	Alice	ET dropped out of the midsummer moon	Tomiko
<First Back> the blues leaking through the autumn red brick wall	Masashi	across the restaurant former lovers' jealous looks	Neil
the two of them picking grapes eating, touching --- a stolen kiss	Patricia	shoulders not touching Victoria Peak	Eiko
moonlight and chill air on our nakedness	Jerry	<Last Back> winter night --- a history of the Second World War handed down	Karin
skills on Ninja written in this scroll	Norihiko	North-South Summit a whiff from a magic pot	Shinji
even for slippers the tailor prefers silk and satin	Ion	was the blossom I saw around Hall of Visions an illusion ?	Meiga
the luxury liner enveloped in a snow storm	Kris	in the depth of the mist mountains and strollers	Tokiko

Conducted & translated by Toshiyo Asaka    Co-translated by Fay Aoyagi  
Poets: Emiko Yoshimura, Fay Aoyagi, Alice Benedict, Masashi Mineta,  
Patricia J. Machmiller, Jerry Ball, Norihiko Sugawara,  
Ion Codrescu, Kris Kondo, Harry Best, Midori Matsumoto,  
Michiko Tsubaki, Tomiko Takashima, Neil Robbie,  
Eiko Yachimoto, Shinji Suzuki, Karin Noborisaka,  
Meiga Higashi, & Tokiko Tachibana

By mail

【Q】不易と流行について、現代の連句実作の問題をからめてお話し下さい。

【A】私は芭蕉の言う流行の句とは「軽み」の句であつたろうと思う。「おくのほそ道」の旅あたり以後、晩年になればなる程、彼の「軽み」への指向は強くなり、元禄七年、西下の旅に江戸を出発する際、杉風・子珊・桃林・八桑と巻いた歌仙「紫陽花や」の巻の「軽み」が、上方でも大評判であつたことに彼は大よろこびした手紙を、杉風あてに出している。それを讀むと、流行の実態と、それがやがては不易と化してゆく過程を想像出来るよう。元禄七年、芭蕉歿後に刊行された「炭俵」こそ、まさに「軽み」が不易に昇華した記念碑と言ふべきものであろう。

それでは、現代連句では不易と流行の関係はどうなっているのであろう。

現代連句を昭和四十五年頃、即ち連句復興が一時に盛り上つたころ以後と限定すれば、その中心となつたのは、根津芦丈及びその門下であり、彼らは「芭蕉に帰れ」を旗印に、古い低俗な俳諧の余臭を峻拒し、その代わり近代的精神を盛り込んで、付けと転じを重視した新しい連句を創り出して行った。その概要は昭和三十六年の「この一路」、昭和四十年の「艸上の虹」、昭和四十四年の「むれ鯨」、昭和四十七年の「夏の日」、昭和五

十年の「摩天楼」など、この派から出された作品集を見る事により、現代連句が辿つた流行の一過程を指摘することが出来る。

ただ、明治以後、古い俳諧の伝統を脱して新しい連句を作ろうと考へ、努力した人は高浜虚子・小宮豊隆・寺田寅彦・松根東洋城・野村牛耳・橋間石・高橋玄一郎・林空華・岡本春人・窪田薫・村野夏生など十指に余る。

このうち、野村牛耳は芦丈の最高の門人でありながら、同じ芦丈門の双璧とうたわれた清水瓢左が、「芭蕉に帰れ」一辺倒であつたのに対して、芭蕉のわび・さびを否定し、古い式目・作法も不合理と思うものは遠慮なく抹殺、付けも大胆な前句と付句の距離の遠い空撓の句を得意とした。勢い、彼の作品は極めて新しく、魅力的であつた。

高橋玄一郎・村野夏生などは牛耳の熱烈なファンで、彼らはそれぞれ空撓を一步進めた矛盾付・脱線付などを創案し、現代連句界に新しい流行を巻きおこしたのであつた。

さらに言えば、橋間石は平成四年に歿したが、彼は早くから独自の非懐紙連句というものを提唱する中に、自ら空撓の付けを流行させることになつた。彼の歿後は門人の秋山正明・澁谷道などにより、一層この付け方が流行しているように思われる。

元禄時代の「軽み」の流行が、遂に不易となつたのと考へ合わせ、今日の空撓の付けの流行は何を生み出すのか注目すべき所である。

◇ 猫養発展基金ご協力有難うございます。

四千元 諏訪欣二

一万元 川野嘉彦 神楽坂連句会

一万八千円 天の川連句東京支部（敬称略）

◇ 基金の口座 富士銀行新宿西口支店

普通3376045 猫養基金

.....\$.....\$.....

あとがき

○ 連句は詩心が第一で、式目に捕われるべきではない、と言われるとなるほどと思ひ、そうじゃない、式目こそが美意識のエッセンスなのだ、と言われると又なるほどと思つてしまふ。文芸の言葉は往々にして政治の世界の「二分法」を真似るが、実作の座と連衆を大事に考へれば、そんなにひどい間違いはないですむかと思ふ。

○ 夏号（七月）より、日高英二・玲さんの編集態勢になります。今迄同様ご協力宜しくお願い申し上げます。

季刊 「ねこみの通信」 第四十三号

発行者 猫養連句会

編集人 町田市金井6-7-6 佛淵健悟

〒一九五-〇〇七二

印刷所 アトリエ・Neko。